２０２６年１１月４日
京都教育大学教務委員会「数理・データサイエンス・AI」
教育プログラム（リテラシーレベル）運営専門委員会

令和８年度「数理・データサイエンス・AI」教育プログラム（リテラシーレベル）自己点検・評価報告書

本学では、令和５年度から「数理・データサイエンス・AI」教育に関するリテラシーレベルの知識習得のために、教育課題対応科目として授業科目「数理・データサイエンス・AI」を開講し、本科目の２単位を取得することでプログラムの修了とする京都教育大学教育学部「数理・データサイエンス・AI」教育プログラム（リテラシーレベル）を開始した。なお、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）については、令和６年度に文部科学省へ申請を行い、認定を受けている（認定の有効期限：令和１１年３月３１日まで）。

自己点検・評価については、教務委員会の下に、教務・学生指導担当副学長が委員長を務める京都教育大学教務委員会「数理・データサイエンス・AI」教育プログラム（リテラシーレベル）運営専門委員会（以下、専門委員会）を設置し、本専門委員会において、本学教育学部学生を対象に、令和８年度に開講した授業科目「数理・データサイエンス・AI」に対して、FD 委員会が作成した授業評価アンケート等の結果を活用し実施した。

１.「学内からの視点」における自己点検・評価の結果

1-1. プログラムの履修・修得状況及び全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画

専門委員会において、全学的に運用されている教育支援システムのデータをもとに、履修者数、履修者の単位の修得状況を確認している。本教育プログラムを構成する授業科目「数理・データサイエンス・AI」は、令和５年度に教育課題対応科目として新たに開講し、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）の認定を受けた後の令和７年度からは、同科目を全学必修科目として位置づけている。今年度は学部１回生全員（323 名）と２回生（5 名）の計 328 名が受講した。

1-2. 授業の満足度および学生の意欲

FD 委員会が作成した授業評価アンケート項目の「あなたはこの授業を受講してどの程度満足しましたか」「あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか」を分析することにより、本授業に対する学生の学習成果を把握することとしている。

図１は、学生の授業満足度の集計結果である。アンケートに回答した学生の 91.1%が「満足した」（「とても満足した（25.2%）」「やや満足した（65.9%）」）と回答していた。図２は、学生の授業に取り組む意欲についての回答の集計結果である。88.4%が「意欲的に取り組んだ」（「とても意欲的だった（27.8%）」「やや意欲的だった（60.6%）」）と回答しており、学生は意欲的にこの授業に取り組んでいたことがわかる。

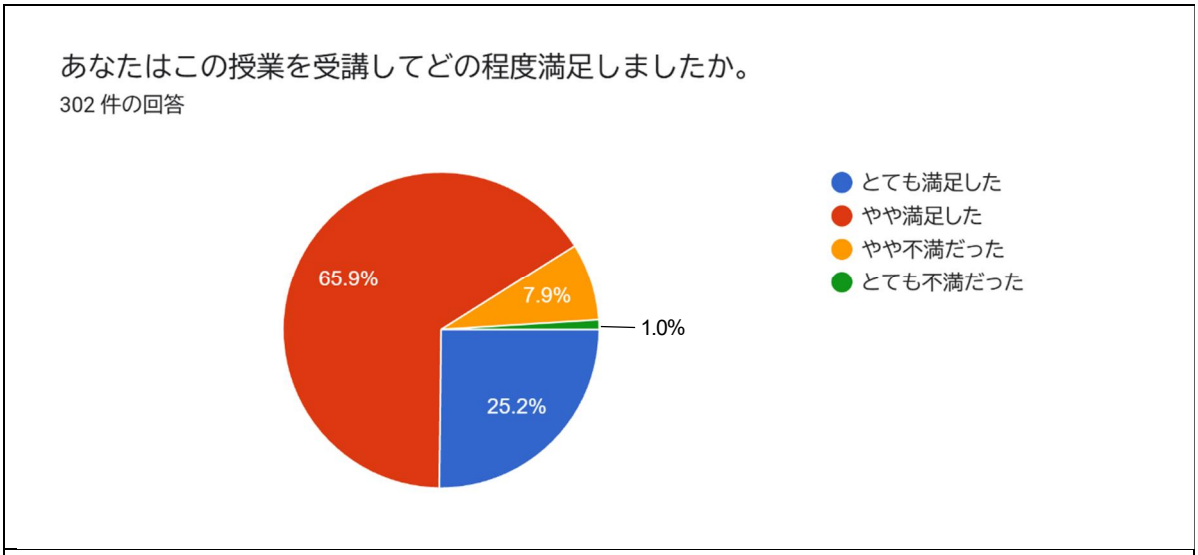


図 1. 授業満足度について

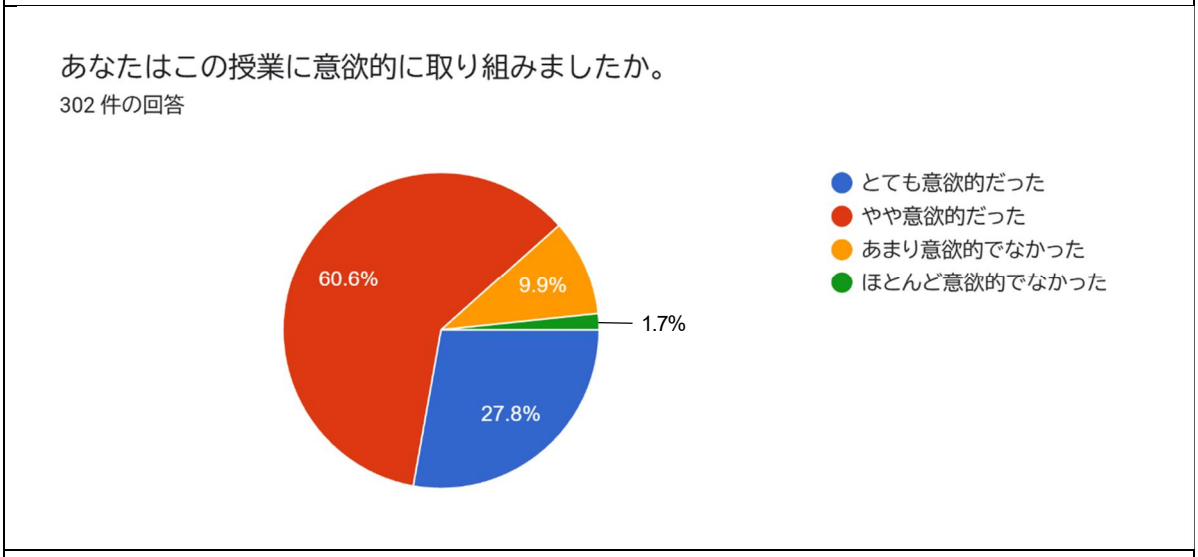


図 2. 授業への取り組み

２.「学外からの視点」における自己点検・評価の結果

2-1. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本学では、毎年度、企画調整室の下に置かれた IR 専門委員会が、卒後３年を経過した本学卒業生へのフォローアップ・アンケート調査を実施している。現時点では、本教育プログラムの修了生を輩出しておらず把握できていない。今後は、本教育プログラムを修了した卒業生に対してアンケート調査等を実施し、本プログラムの効果や評価等について検討していく予定である。

2-2. 産業界からの視点を含めた教育プログラムの内容・手法等への意見

本学では、京都における教員養成の質的向上を図るため、京都府教育委員会及び京都市教育委員会と連携し、意見交換を随時行っており、「国立大学法人京都教育大学連携協議会」においては、両教育委員会と小中学校の校長先生方から、教育に関するさまざまな根拠を示すうえでのデータ分析の重要性、「情報」教育を図っていくうえで、「数理・データサイエンス・AI」教育プログラムのスキルの必要性について、意見をいただいている。今後も外部からいただいた視点を取り入れて、教育プログラムのより一層の充実へ繋げていく予定である。

３．数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させることや、より「分かりやすい」授業とすることについて

3-1. 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

図３は、「あなたはこの授業で取り扱ったテーマ・領域に興味を覚えましたか。」との質問に対する集計結果である。80.1%が「覚えた」(「とても覚えた（23.5%)」「やや覚えた（56.6%)」) と回答していた。昨年度（約 77%）より高くなっており、このテーマへの興味を引くことについては一定の成果が得られていると考えられる。

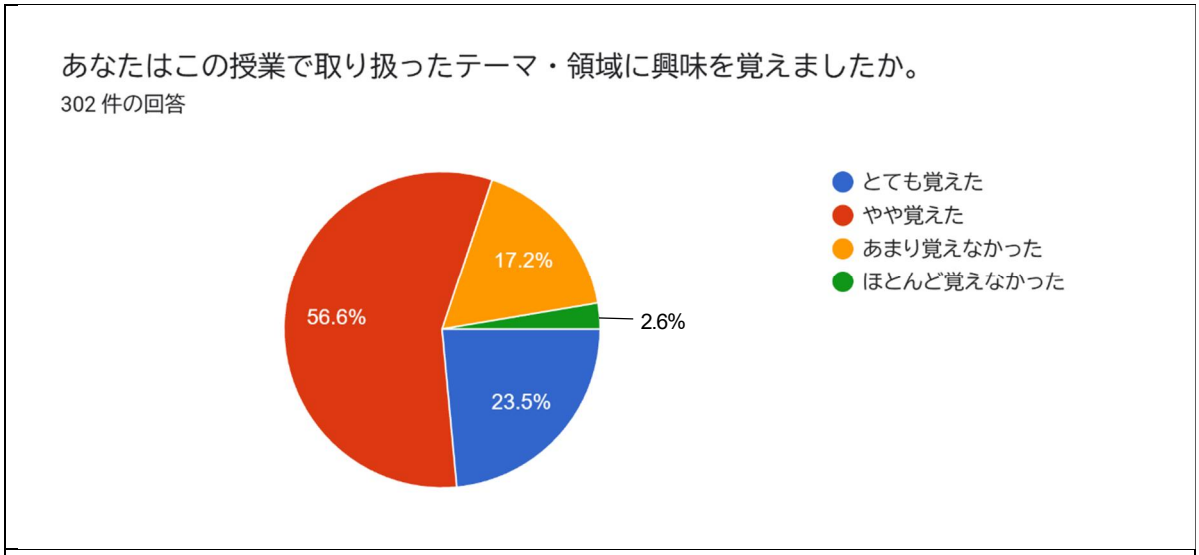


図 3. 授業で扱ったテーマ・領域への興味について

3-2. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

図４は授業の難易度について、図５はテキストや配布資料のレベルに対する集計結果である。授業の難易度については、「とても難しかった」との回答は 10.3%であり、昨年度（13.6%）よりも減少している。また、「やや難しかった（47.7%)」「ちょうどよかった（38.4%)」との回答が 86.1%であった。また、テキストや配布資料のレベルについては、「とても難しかった」との回答が 5.0%でこちらも昨年度（10.3%）よりも減少している。また、「やや難しかった（38.1%)」「ちょうどよかった（55.0%)」「やや易しかった（1.0%)」であった。「ちょうどよかった」「やや難しかった」との回答が全体の約９割を占めており、おおむね適切なレベルの内容であったことがうかがえる。

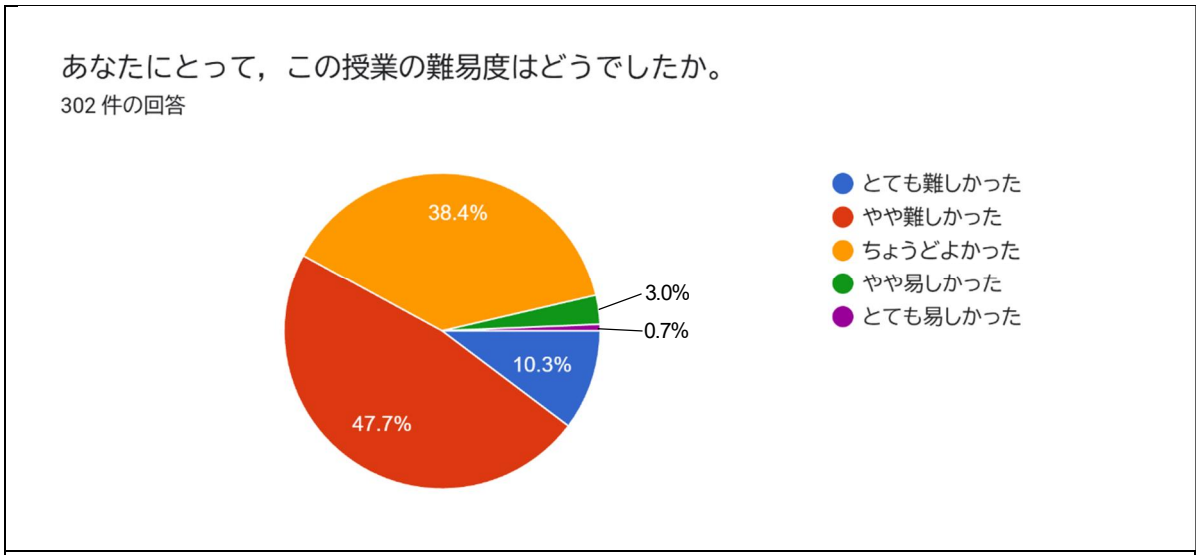


図 4. 授業の難易度について

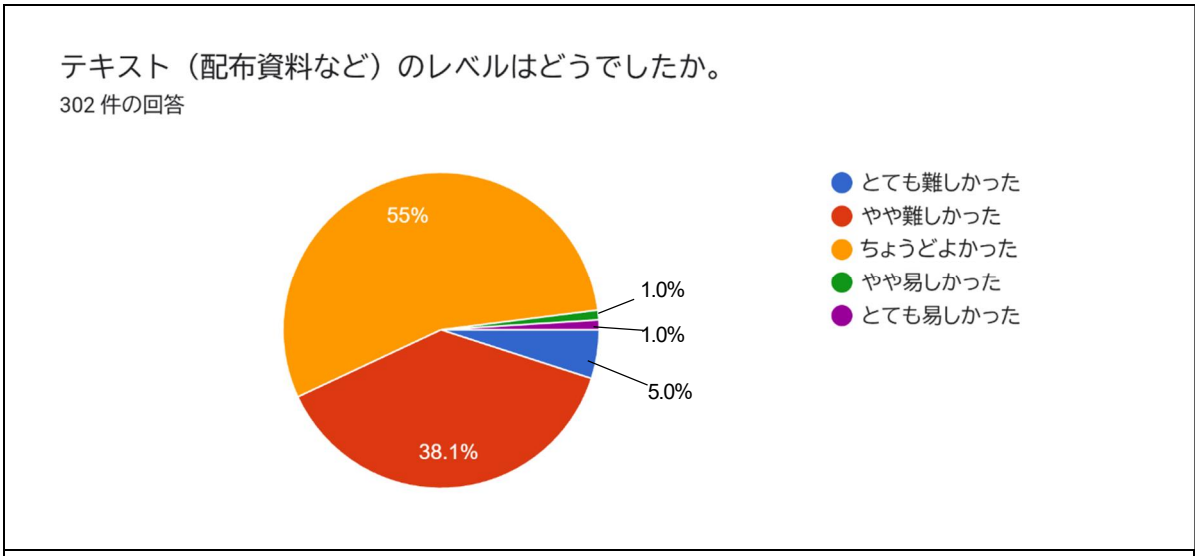


図 5. テキスト・配布資料のレベルについて

図６は、「この授業は体系的でよくまとまっていたと思いますか」に対する回答結果である。87.1%が「そう思う」（「とても思う（24.8%）」「やや思う（62.3%）」）と回答し、「思わない」は 12.9%（「あまり思わない（11.9%）」「ほとんど思わない（1.0%）」であった。「そう思う」の割合は昨年度（84.0%）よりも改善している。また、図７は、「授業の説明はわかりやすかったですか」に対する集計結果である。76.8%が「わかりやすかった」（「とてもわかりやすかった（18.5%）」「ややわかりやすかった（58.3%）」）と回答し、「わかりにくかった」は 23.2%（「ややわかりにくかった（19.9%）」「とても分かりにくかった（3.3%）」）であった。説明のわかりやすさについては昨年度（72.5%）よりも改善しており、説明方法の工夫の成果が出ていると言える。

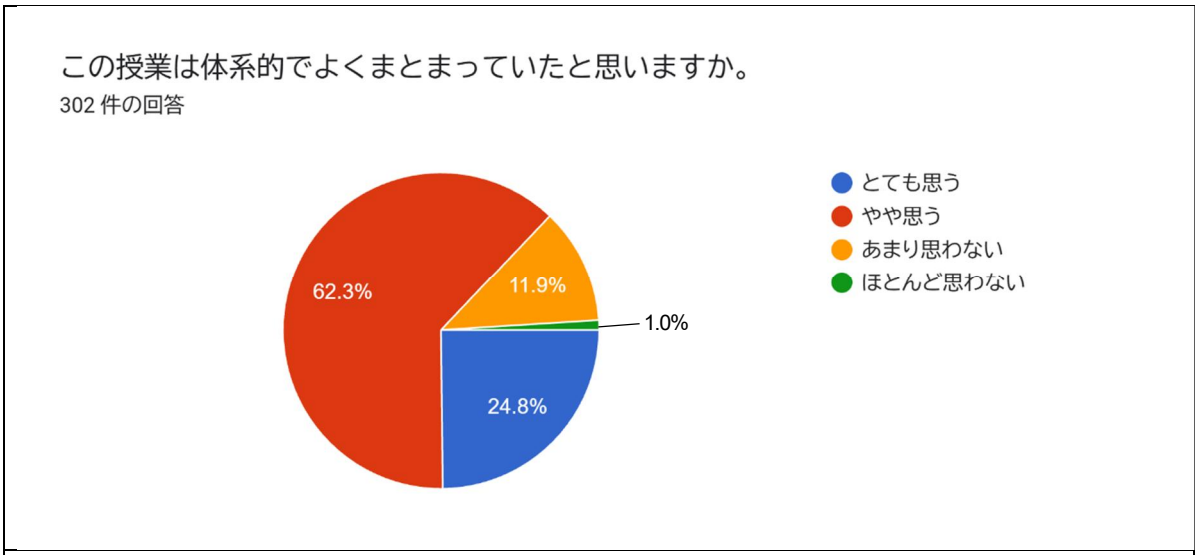


図 6.　授業が体系的でまとまっていたかについて

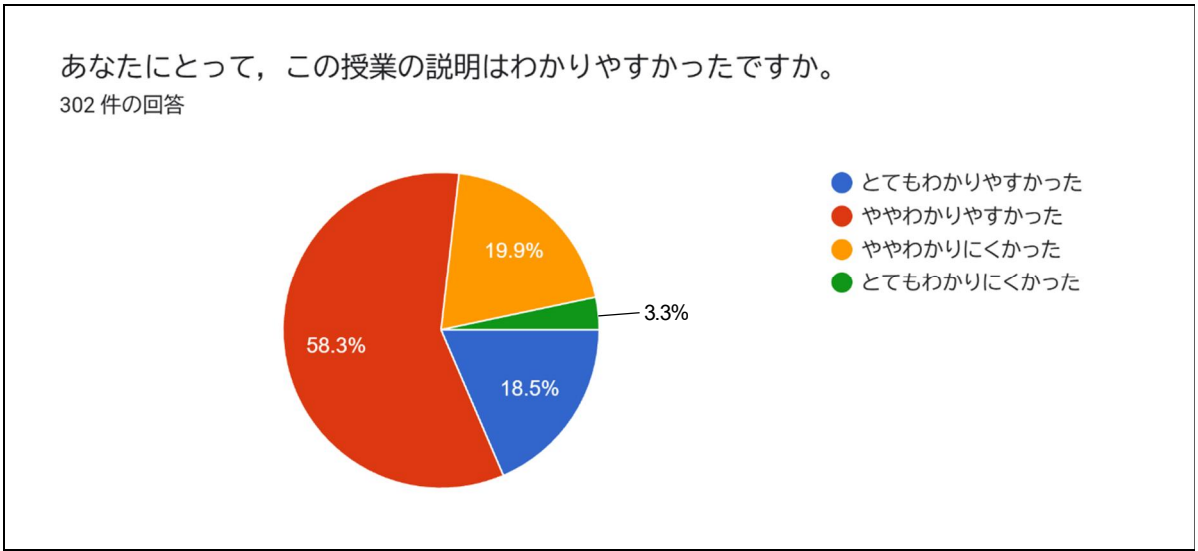


図 7. 授業の説明のわかりやすさについて

図８は、「授業の内容に対して、進む速度（進度）はどうでしたか」の集計結果である。89.7%が「適切だった」（「とても適切だった（16.2%）」「適切だった（73.5%）」）と回答し、10.3%が「不適切だった」（「やや不適切だった(9.6%)」「不適切だった（0.7%）」）と回答した。授業の進度については、概ね適切であったと考えられる。また、図９は、「担当教員は受講生の理解や反応を受け止めながら授業を進めていたか」についての集計結果である。74.5%が「そう思う」（「とても思う（19.2%）」「やや思う（55.3%）」）と回答し、25.5%が「思わない」（「あまり思わない（21.5%）」「ほとんど思わない（4.0%）」）と回答していた。担当教員が受講生の反応を受け止めていたかについては、昨年度（72.5%）と比べて改善している。

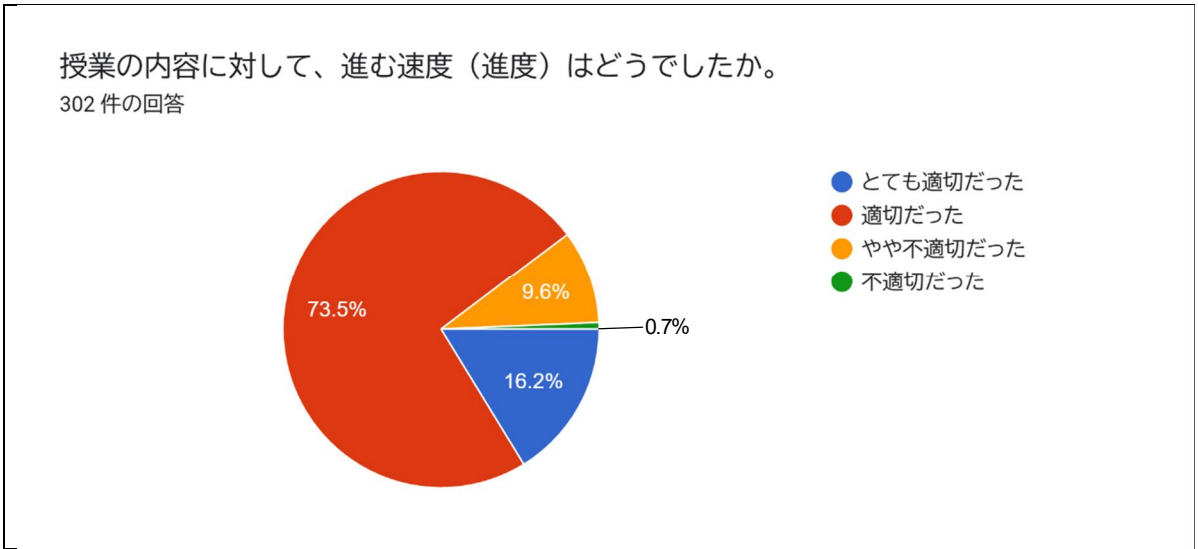


図 8. 授業の進む速度（進度）について

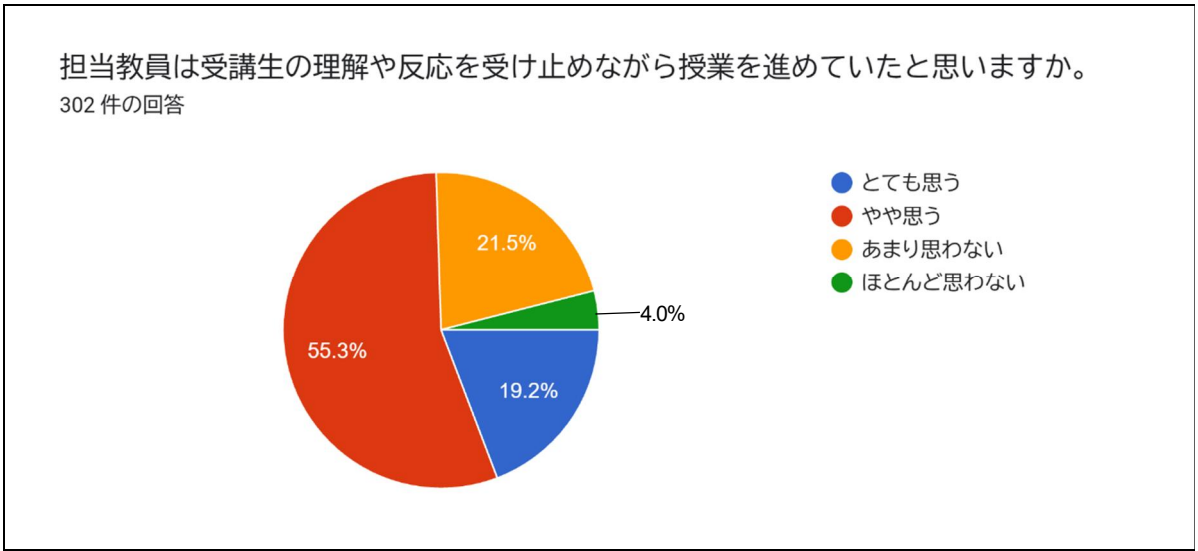


図 9. 受講生の理解や反応の受け止めについて

４．令和９年度の授業開講に向けて

学生への授業アンケートの結果においては、大半の質問項目において昨年同様に比較的高い評価が得られており、これまでの授業改善の効果が見受けられる。

授業全体の満足度も引き続き高く、受講生も意欲的に授業に取り組んでいたと考えられる。また、授業内容に対する興味・関心については、昨年度よりも高い結果となっており、この分野についての関心の高さがうかがえる。授業の難易度については、「難しかった」と回答する学生の割合が昨年度から減少しており、昨年度の結果を踏まえての改善の効果が出ていると考えられる。授業の体系性についても昨年度よりも評価が高く、今年度から担当教員が３名から４名に増えたが、担当教員間の連携についてはある程度うまくいっていると判断できる。

一方で、受講生の反応を受け止めながら授業を進めていたかについては、昨年度よりも改善しているものの、他の項目と比べるとやや低い評価となっている。大人数のクラスであることから、授業中に一人一人の様子を観察するのは困難ではあるが、オンラインなどを活用しつつ受講生に合わせた授業を進めていくことが今後の課題として挙げられる。